

SDGs 学習の つくりかた

開発教育実践ハンドブックⅡ

実践事例編

中学校での SDGs 学習

松倉紗野香（埼玉県中学校教諭／開発教育協会理事）

1. 中学校における SDGs 学習の現状

現在、中学校では SDGs 学習の主な実践の主な場面として「総合的な学習の時間」の中で学習活動が展開されることが多い。その際には、大まかにいうと教師や外部講師から SDGs について情報を得ることから始まり、生徒が SDGs のゴールや企業、自治体の取り組みについて調べ学習を行い、調べた内容を校内で発表する、という流れをたどることが多い。こうした「SDGs」をテーマとした学習の広まりや学習の可能性を感じながらも、学習活動に対して以下のような疑問や課題を感じることはないだろうか。

① SDGs を「知ること」が目的になっていないか？

SDGs について知り、その内容について調べ、それらをまとめることで、生徒たちは SDGs やそれぞれのゴールについては詳しく説明することはできるようになる。こうした学習では、SDGs に詳しい生徒を育てることが目的になってしまうことが散見される。

② 何のため、誰のための SDGs 学習なのか？

多くの学校が SDGs を取り入れた授業や教育を展開しようとしている。その際に、それぞれの学校は、SDGs をなぜ扱うのか、そうした学習を通してどのような生徒を育みたいのか、といった議論が交わされているだろうか。SDGs 学習を進めることの目的とその学習の主体となる生徒たちにとってどのような意味があり、どのような資質・能力を育むことになるのか、を考えた学習がつくれているかを問うことが必要である。

③ SDGs 学習のその先は？

SDGs は世界共通の「目標」である。それらの目標は「知る」ためにあるのではなく、「達成する」ためにあるのだ。SDGs について知ること、調べること、まとめることの学習のその先に、「どのように達成するのか」という持続可能な社会の実現を目指した学習が必要である。「まとめ・発表」のその先の学習を描いてほしい。

2. 「SDGs の達成を目指した学習」をつくる

学校全体で SDGs を学習の柱に置いたカリキュラムを作成した埼玉県上尾市立東中学校（上尾東中）を事例として紹介し、中学校において SDGs を学校に取り入れるための視点とその方策に触れたい。

上尾東中では、文部科学省より「研究開発学校」の指定を受け、2015 年度から 2018 年度の 4 年間に於いて「総合的な学習の時間」を「グローバルシティズンシップ科」（GCE 科）に置き換え、中学校におけるシティズンシップ教育のあり方について学校全体で研究を推進してきた。研究指定期間を終えた現在は「総合的な学習の時間」に戻しつつも、これまでに培った学習方法や内容を残して探究的な学習を用いたシティズンシップ教育を継続して実践している。

同校では、2016 年度から GCE 科のカリキュラムに SDGs を学習の柱として位置付けている。SDGs

を学習活動に取り入れる際には、「なぜ学校でSDGsを取り入れた学びをつくるのか」を教職員全員で議論する場を設け、共通理解ができる場をつくった。

GCE科では、「社会参画意識の向上」「持続可能な社会の担い手育成」「多文化共生意識の習得」の3つを研究の柱とし、GCE科における目指す生徒像、育みたい資質・能力 (Box1 参照) を明らかにしていた。そうしたことを繰り返し教職員で確認し、GCE科をはじめとする教育活動をとおして「SDGsの達成を目指した学習」をつくること、そして、「SDGsの達成を目指して社会に参画できる生徒」の育成を目指すことを学習の目的として実践を積み重ねてきた。

Box1 上尾東中学校 GCE科 目指す生徒像と資質・能力

<目指す生徒像>

- 1 自らの考えや根拠のある意見を持って社会に参画できる生徒
- 2 多様な文化、習慣、考え方を尊重し、共に生きることができる生徒
- 3 自ら課題を見つけ、物事を多面的に考えられる生徒
- 4 クリティカルな思考を身に付け、自ら進んで調査し発信することのできる生徒
- 5 一人の市民として、より良い社会づくりに協働して参画できる生徒

<8つの資質・能力>

【社会参画】【多文化共生】【課題発見・設定】【批判的思考】

【協働】【資料収集・活用】【発表・発信】【課題解決】

研究最終年度(2018年度)のGCE科カリキュラムは、表1のとおりである。

同校のカリキュラムでは、中学1年生のはじめにワークショップ形式で社会課題について体験をとおして課題の解決の必要性に気づくことから学習がはじまる。2年生では、持続可能な社会の実現に向けて社会の中で活躍する方々との出会いをとおして、一人一人が課題解決にどのように関わっていくのかを考える。3年生では、まちづくりを題材に自分たちの住むまちをより持続可能なまちにするための提案書や企画書を作成してきた。カリキュラムの作成にあたっては、探究型の学習を一貫して進め、学年があがるにつれて、生徒が社会に参加する度合いを上げ、自らが社会の一員として課題を見出し、その解決に向けて社会と関わりながら行動する場面を多く設けられるようにした。

表1 2018年度 GCE科カリキュラム(一部抜粋)

	1年生	2年生	3年生
1 学 期	世界の現状を知ろう (ワークショップ体験)	生き方・働き方を考えよう (職場体験学習×GCE)	SDGs フォトコンテスト (修学旅行×GCE)
	生徒総会に向けて(全校)		
2 学 期	SDGsを自分のことばで (SDGs理解のための活動)	持続可能な社会の実現に向けて (校外学習×GCE)	上尾をプロデュース ・政策評価
3 学 期	社会の中にあるSDGs ・講演会 ・SDGsの視点から見る職業	・関係機関訪問 ・SDGs達成に向けた提案 ・レポート作成	・まちづくりとSDGs ・政策提案

GCE 科の特徴は、数多く挙げることができるが「SDGs の達成を目指した学習」という視点から見た際には、以下の3点が挙げられる

① 社会課題を「自分ごと」と捉える工夫

それぞれの学年、単元の中で扱う「社会課題」は多様である。また2年生以降は、学習テーマを生徒たちが決めている。そのため、毎年、異なる社会課題を学習テーマとして扱うことになる。

それらの社会課題を「自分ごと」として捉え、考えられるようにするためワークショップ型の授業を取り入れたり、学習テーマの設定理由を自分の生活と結びつけて考えたりする場を設ける工夫をしている。SDGs に示されている課題を「遠くの国の課題」や「自分とは別の世界の課題」として捉えるのではなく、それぞれが日々の生活に関連づけて考えることで責任ある市民として活動するきっかけを持つことができる。

② 社会参加を目指した「参加型学習」としての学習活動

上尾東中では、授業形態を「参加型学習」としている。ここで言う「参加」は、単に授業やワークショップに積極的に参加していることを指すのではなく、社会への参加を意味している。学年が上がるにつれて、「参加」の度合いが高まるようにカリキュラムを設定し、生徒が社会への参加を意識する場面を多く取り入れた学習をつくってきた。SDGs の達成には一人ひとりの市民が社会に参加し、課題の解決に関わる必要がある。参加の機会を学習に取り入れ、市民として活動する姿勢を育むことを大切にしている。

③ 多様な関係機関と連携した学び

2年生では、クラスごとのテーマ別学習で、3年生では、まちづくり学習で、それぞれ多様な関係機関と連携した学習をつくるようにしている。2年生では、テーマについて専門家の方にインタビューする場を設けたり、3年生では、まちづくりに直接関わっている市役所や地域の方にお話を聞く機会を設けたりしている。これまでに企業、大学、NGO、市役所、自治会など多様な関係機関の方々に支えられて GCE 科の学習をつくってきた。SDGs の達成では「パートナーシップ」が必要だとされている。学校がそれぞれの専門分野の関係機関と連携することでパートナーシップを育むことができ、多様な視点で SDGs の達成を目指した学習をつくるのが可能になる。

3. 「SDGs ありき」でスタートしない学習

上尾東中では、毎年、中学1年生の1学期にワークショップ型の学習を繰り返し行っている。

1年生では、「世界がもし100人の村だったら」のワークショップを最初に実施し、世界で起きている格差や不均衡の現状を体験することから GCE の学習を始めている。その後は、学年の教員が担当を決めて「ジェンダー」「地球温暖化」「水問題」「食料問題」など3つ～4つのワークショップを実施する。これらのワークショップでは、今、世界で起きている状況に目を向けること、それらの状況が自分たちの生活とどのように関わっているのか、について気づけるような仕組みを作ること、そして、授業をとおして社会課題を「自分ごと」として捉えられるようにすることを大事にしている。

1学期に実施する多様なトピックのワークショップをとおして、生徒の多くは2学期のはじめ頃になると「なぜ、世の中にはこういった問題が生まれてくるのだろう」「どうして社会の中はこんなにも不平等なのだろう」「こうした問題に対して、世界は何をしているのだろう」等、数多くの「なぜ」「どうして」といった疑問を持つようになる。

生徒の意識が社会課題に向いたところで、教員から「SDGs」を紹介する場面を設ける。そして、SDGsを紹介する際には最初に生徒たちに「あなたたちが世界の課題を解決ための目標をつくるとしたら、どのような目標をつくりませんか?」と問いかけることから始めている。生徒たちは、それまでのワークショップで得た体験をもとにして、自分たちでオリジナルの「目標」をつくっていく。

そこまで考えたところで、初めて教員からSDGsについて説明をする。その際には、「誰一人取り残さない」という強いメッセージがあること、世界中のすべての人たちが協力する目標であること、そして目標の達成のためには、私たちが今まで持っていた考えや意識、生活、行動を変えていくことが求められていることを生徒たちに伝えるようにしている。

このように上尾東中では、けして「SDGsありき」で学習をスタートさせるのではなく、生徒たちの「もっと知りたい」や「自分たちも解決に関わりたい」といった好奇心を引き出せるよう学習方法の改善を繰り返してきた。

4. 教科等横断型の授業づくり

2021年度から使用される教科書の中には、「SDGs」を掲載している教科書もあり、今後は社会科や英語科等の教科の授業の中でもより一層学習が広まっていくことが考えられる。そうした時には、中学校では、教科学習の中でどのようにSDGsを取り入れようか、と考える学校も多いだろう。

上尾東中では、学校全体でSDGsを学習の柱としたカリキュラムを作成すると同時に、教科の専門性に着目し、それぞれの教科がその専門性を活かし、GCE科に、またSDGsの達成にどのように貢献できるのか、という問いを立てて教科ごとに研究を進める時間を設けた。

教科等横断型の授業事例として、英語科の授業を紹介したい。

筆者は、中学3年生英語科5Rs (Reduce, Reuse, Recycle, Refuse, Repair) について書かれた単元において社会課題の解決と結びつけ、教科横断型の学習を実施した。教科書の本文で示されている内容を読むと、同校の生徒たちがGCE科の中で扱ってきた環境問題に関するテーマと重なる内容も多かったことから、本単元では、GCE科、家庭科、理科、社会科等の学習内容と関連付け、GCE科の「資料収集」「課題解決」「発表・発信」の3つの資質能力の育成を目指す単元づくりを行った。

実施にあたっては、教科書に書かれている内容だけにとどまらず、英字新聞や海外のニュース番組等を活用し、できるだけ実社会に根付いた教材を扱うことを試みた。授業の中で生徒たちは、各国の取組を英字新聞や海外の情報サイトを活用したり、他の教科の教科書や資料集を用いたりして、プラスチック製品の輸出入や生態系に関することを調べていた。(資料収集)

実践当時(2018年6月頃)は、実際にプラスチックストローやビニール袋の使用を廃止や代替品を用いようとするファストフードチェーンやスーパーがメディアでも多く報道されていた時期でもあった。こうした取組について多様な視点(消費者、企業、生産者など)に立って考え、プラスチック製品の削減が社会課題の解決とどのように関連しているのかについて明らかにしながらグループごとにアクションプランを作成し、自分たちが実行できたことを英文エッセイにして発表した。(課題解決)(発表・発信)

本単元を実施するにあたっては、理科や家庭科等の他教科の専門性を持った先生方の協力を得ることで授業を進めることができた。SDGsの達成を目指した実践を進める際には、1つの教科内で学びが完結することは考えにくい。そうしたときに「教科の専門性」を持つ先生方がいる環境があることは非常に心強いことである。

5. 「教師」の役割を捉え直す

SDGs 学習を進めるにあたって、教師はその役割について捉え直すことが必要だろう。SDGs で示されている様々な社会課題は、今、現実社会において誰もが唯一の正解を持ち合わせているわけではない。そうした社会課題をどのように解決していくのか、を考える際には誰もが「学習者」であり、「探究者」である。それは教室の中でも同様である。つまり、生徒も教師も課題の解決に向けて共に考え、悩みに、共に学びをつくっていくことが求められている。

知識を「教える」ことに注力するのではなく、中学生の生徒たちが持っている感性や未来への漠然とした不安や思いを共有することから学習をはじめてはどうだろうか。そのためには、安心して対話ができる場づくりであり、生徒の思いや考えを引き出し、学習につないでいくファシリテーターとしての役割となるであろう。

SDGs の達成には、一人一人が目標の達成に向けて「変容・変革」することが求められている。学校に置き換えて言えば、これまでの教育活動そのものや、授業のあり方について、何をどのように変容させていくのか、その具体的な内容を明らかにすることが必要であり、その姿勢が求められている。このことは、新型コロナウイルスの影響を受け、学校や授業そのものについて改めて問い直し求められている現状とも合致する。国連は各国に対して新型コロナウイルスからの「より良い復興 (Build Back Better)」を求めている。このことは、従来の学校生活に戻すことだけを選択肢にするのではなく、ここから新たな「学校」づくりに向けた方策が打ち出されることが求められていることと捉えることができよう。

国連では 2020 年から 2030 年の 10 年を SDGs 達成のための「行動の 10 年 (Decade of Action)」とし、世界各国で実施されている取組のスピードをはやめ、規模を拡大することが必要であることを示している。新型コロナウイルスの影響により社会の脆弱性がより明確になった。学校教育もその影響を大いに受けたことだろう。こうした状況を少しでも改善させ、持続可能な社会の実現に向けた具体的な「行動」を教師はどのように示していくのか、教師自身も問われている。

【参考文献】

埼玉県上尾市立東中学校 (2019) 『平成 30 年度研究開発学校 最終報告書』

松倉紗野香「上尾市立東中学校による実践」田中治彦(他)編 (2019) 『SDGs カリキュラムの創造』 学文社, p.98-133

国際連合広報センター「SDG サミット、人々と地球に資する野心的な行動に勢いをつける (プレスリリース日本語訳)」 https://www.unic.or.jp/news_press/info/34911/ (2020 年 9 月 19 日最終閲覧)

タイトル 「SDGs 学習のつくりかた 実践事例編 中学校での SDGs 学習」 URL : <http://www.dear.or.jp/event/6950/>

発行日 2021 年 5 月 18 日

企画 SDGs と開発教育研究会

執筆 松倉紗野香 (埼玉県中学校教諭/開発教育協会理事)

発行 NPO 法人開発教育協会 (DEAR)

〒112-0002 東京都文京区小石川 2-17-41 富坂キリスト教センター2 号館 3 階

Tel : 03-5844-3630 Fax : 03-3818-5940 E-mail : main@dear.or.jp URL : <http://www.dear.or.jp/>

